あぜ道
稲作技術情報
Ｎｏ．３５５（令和５年 No. ２）
令和５年４月10日
▼発　行▼
山本地域振興局農林部農業振興普及課

徹底した温度管理で健苗育成を!!

１　出芽・育苗期間の管理（中苗）

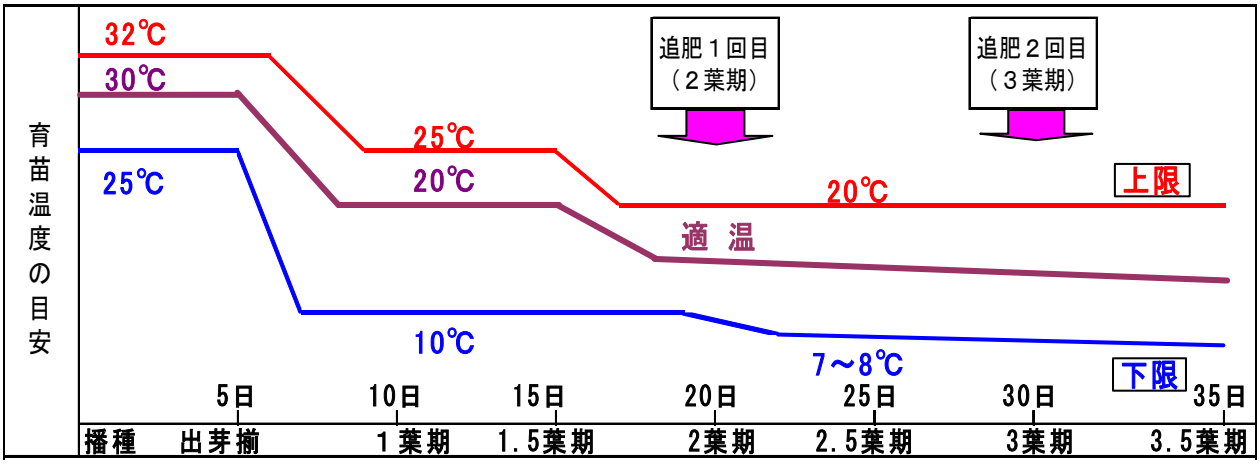


図　出芽・育苗温度の目安（中苗）

①温度の管理

・４月６日に仙台管区気象台から発表された１か月予報によると、平均気温は平年より高い予想となっています。また、天気は数日の周期で変わる見込みとなっています。ハウス内の温度が上がりすぎないよう、温度管理に十分注意しましょう。

・出芽長は0.5cmを目標とします。出芽長を伸ばしすぎると出葉が遅れやすくなるので注意が必要です。

・細菌病等の発生を防ぐため、出芽までの温度は32℃を超えないようにし、出芽後の再被覆は行わないようにしましょう。

・通気管理は１葉期頃から実施してください。２葉期頃までは、最高気温25℃以下、最低気温５℃以上を保ちます。2.5葉期を過ぎたら、特に寒い日でない限りハウスを開放し、徐々に外気温に慣らしてください。

②水の管理

・かん水は早朝を基本とし、遅くとも午前中に終えるようにしてください。また、かん水回数はできるだけ少なくしてください。

③育苗期の追肥

・２葉期と３葉期頃に、それぞれ箱あたり窒素成分で１ｇを施用します。

・追肥後は散水して葉身に付着した肥料を洗い流し、肥料焼けを防ぎます。

		１箱あたり	100箱あたり
かん水量		５００ｃｃ	５０リットル
肥料	硫安	５ｇ	５００ｇ
	液肥２号	１０ｃｃ	１リットル

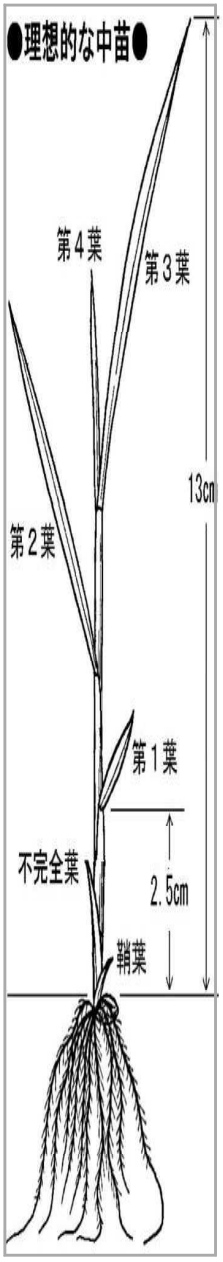
※育苗ロング肥料を使用した場合は、追肥は不要です。

２　苗立枯病の防除対策

苗立枯病は、育苗期間中に発生する土壌伝染性病害です。病原は土壌中に存在する糸状菌（カビ）で、病原菌の種類によって症状や発生要因、適用農薬が異なります（防除薬剤の種類は、前回発行のNo.354を確認してください）。

①耕種的防除法
- 清潔な資材を使用し、育苗施設を清潔に保ちます。
- 極端な高温や低温は病害の発生を助長するため、温度管理は十分に注意してください。
- 土壌の過度の乾湿により発生する種類の菌があります。前項を参考に適切な水管理を行ってください。

②薬剤による防除法
- 床土混和や播種時に防除薬剤を使用しなかった場合は、出芽後、発病前にタチガレエースＭ液剤、または出芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注します。



（原寸大）

３　育苗期いもち病対策

いもち病の発生は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みが主な要因です。

育苗施設内および近隣の稲わら・籾殻を撤去し適正な種子消毒を行った上で、育苗期いもち防除と本田の葉いもち防除を確実に行うことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。

【育苗期いもち防除】 次のいずれかで防除を行う

薬　剤　名	処　理　時　期	希釈倍数・散布量
ベンレート水和剤※	播種時～播種７日後頃（かん注）	500倍　500ml/箱 1,000倍　1,000ml/箱
ビームゾル	緑化始期（かん注）	500倍　500ml/箱

※ベンレート水和剤の播種時処理は、生物農薬（タフブロックやエコホープDJ）の防除効果を低下させるため、体系処理は行わない。

【　水稲育苗施設内での注意事項　】

水稲育苗終了後のハウスに作付けされた野菜類・花き類において、残留農薬基準値を超過する、あるいは生育障害が起こるなどの事例が発生しています。水稲育苗後に野菜類・花き類を作付けする場合は、以下の対策を実施してください。

①水稲育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷き、育苗期に使用した農薬が土壌に接触・浸透しないようにしてください。

②移植当日に箱施用剤を用いる場合は、育苗施設外で散布処理します。

③育苗終了後の無孔シート撤去時は、シート上の水や土壌などを育苗ハウス内にこぼさないように作業してください。

不明な点がある場合は、山本地域振興局農林部農業振興普及課（℡52-1241）までご連絡ください。